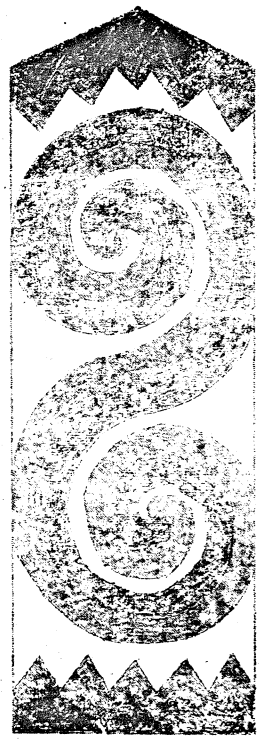
平城宮跡昭和39年発掘調査概要



奈良国立文化財研究所

平城宮跡昭和39年発掘調査概要

目次

1. 朱雀門付近の調査 ―――――――――――――― 1

2. 才2次内裏東側地域の調査 ―――――――― 2

3. 才2次内裏北側地域の調査 ―――――――― 2

付図

1. 平城宮跡全域図

2. 朱雀門付近発掘調査（才16・17次）遺構配置図

3. 才2次内裏北側地域発掘調査（才10、13、19、20次）遺構配置図

4. 平城宮跡西南隅（才14次）〃

5. 〃 新井式（才14次下層）〃

6. 玉手門付近（才15次）〃

7. 〃 北部地域（才18次）〃

表紙カット

才14次発掘出土の隼人楯

平城宮跡昭和39年発掘調査概要

特別史跡「平城宮跡」の発掘調査として、奈良国立文化財研究所は、昭和38年度の第13次発掘調査以降に第14～20次の7回の発掘調査をおこなった。その各次別の調査地区、発掘面積・発掘期間は次表の通りである。

発掘次数	調査地区	発掘面積	調査期間
14	宮城西南隅付近	57㎡	昭和38年12月7日～ 〃 39年3月31日
15	宮城西端、西面南門(五十門)付近	37〃	〃 39年2月21日～ 3月31日
16	宮城南面中央、朱雀門付近	36〃	〃 39年2月10日～
17	宮城南面中央、第16次発掘地域北側	59.4〃	〃 39年2月20日～
18	宮城西端、近鉄奈良線南側	25〃	〃 39年4月1日～
19	第2次内裏東側	91〃	〃 39年4月1日～
20	一条通り北方、第2次内裏北側	34〃	〃 39年6月15日～

ここでは、昭和39年に実施した調査のうち、朱雀門付近を発掘した第16次・17次と第2次内裏周辺を発掘した第19次・20次の発掘調査について、その概要を報告する。

1. 朱雀門付近の調査（第16・17次）

第16・17次の調査地域から、朱雀門、東西両脇門とこれに連なる築地のほか、柵2条、掘立柱列2条、溝などを検出した。

朱雀門は発掘地域の中央部南端で発見されたが、門の南半部は史跡指定地外の道路と池堤の下になり確認不可能である。基壇上面はほとんど削平され、基壇の周囲も縦横に掘られた溝のため破壊されていたが、掘込みの基壇地固めと、門の棟通と北側柱通の2列の礎石

下根固め石の存在により規模を知ることができた。基壇の大きさは東西約32m，推定した南北約17mである。門の平面は桁行5間（約25.3m），梁行2間（約10m）で，柱間は約5m（天平尺17尺）の等間である。なお，礎石抜落痕等の基壇周囲の設備および階段は遺存していない。

朱雀門の東西で門に取り付く築地を検出した。築地本体の基底幅は約2.7mで，北側に幅約3mの犬走りと幅約80cmの溝があったが，南半部は道路下のため確認できない。溝は東西両側とも，東は朱雀門の南北中軸線から東方約22mで，西は同じく中軸線の西方約30mでそれぞれ北へ折れ曲がり，朱雀門には達しない。

朱雀門の南北中軸線より約29m離れた対称の位置で築地にあけられた脇門を東西に検出した。脇門は東西とも築地の中心線上に立てられた2本の掘立柱（柱間約4.3m）からなる。東脇門では掘立柱に接して北側に十四40cm程度の凝灰岩切石が据え置かれ，西脇門では同様の位置に玉石が敷き並べられている。これらは扉の設備に関連したものと考えられる。

東脇門の北方約16mで，東西にならぶ掘立柱の柵（柱間約2.7m）と溝を検出した。またこれと対応する西脇門北方でも東西溝を検出したが，柵は発見されていない。

朱雀門の北で東西約23mにわたり，上面に小石を敷き詰めた褐色土の盛土がある。この盛土は，調査地域の中央部以北では削平されており追跡できないが，朱雀門内の通路を示す遺構と推定される。調査地域の北半では，この盛土面の東西両端のほぼ延長にあたる位置に2列の南北溝がある。これらの溝は通路の側溝としての機能をもったかと考えられるが，2つの溝の構造に差違があるため即断はできない。

その他，朱雀門基壇上の北部に角柱を使用した東西方向の掘立柱柵（柱間約3m）が，朱雀門西北方に2個の掘立柱（柱間約3.2m）があるが，いずれも遺構の重複関係から，朱雀門廃絶後の遺構と判明した。

2. 才2次内裏東側地域の調査(才19次)

一条通り南側の才19次調査地域のうち，現在までに発掘を終了したのは，才2次内裏内郭の築地回廊に東接した8.6アールである。

この地域から発見した主な遺構は，建物3棟・溝1条で，いずれも盛土面上で検出された。

溝は凝灰岩切石を並べ，発掘地区の中央部を東西にはしり，1/30の勾配で東に下降している。底面幅約20cmで断面は逆台形を呈し，側部は切石の二段積みで一部にはさらに上に玉石がつまれている所もある。埋土からみて溝は2回の使用が考えられる。今回の調査では35.6mを検出しただけであるが，おそらく西は内裏内郭に始まり，東は1928年岸熊吉が一部を調査した玉石積の南北溝に連するものであろう。

建物は少なくとも2回にわたって造営されている。

——A期——　凝灰岩溝の南に5間×2間東西棟（桁行10尺・梁間6.5尺）がある。凝灰岩溝北側の1間以上×4間の東西廂付き南北棟（桁行・梁間共に10尺）はその配置から考えて同期のものであろう。

——B期——　凝灰岩溝南の4間以上×3間の西廂付き南北棟（桁行6尺・梁間8尺）は，柱穴の切りあい関係からみて，A期の5間×2間東西棟より新しい。

3. 才2次内裏北側地域の調査(才20次)

才20次調査は才13次調査地域に隣接した東地区と，平城陵参道西側で才11次調査地域に東接した西地区で実施した。

西地区での主な発見遺構は，建物4棟・柵1条・土坑1などであり，少なくとも2期以上にわたって造営されている。

——A期——　才11次調査で柵と考えられていた柱列は13間×2間の南北棟（桁行・梁間共に10尺）で，礎石をもつ建物と判明し

た。また，オ11次調査の際，平城陵参道沿いで両端を検出した南北柵は，今回は5間分を検出し合計23間以上のものとなる。これはオ2次内裏北部内を区画するものであろう。

——B期——　西寄りの3間×1間南北棟（桁行・梁間共に10尺）は礎石を据えた建物で，礎石穴の切りあい関係からみて，13間×2間南北棟よりも新しい。

中央部の3間×2間南北棟（桁行6尺・梁間7尺），その南の5間×3間南北棟（桁行7.5尺・梁間7尺）は共に掘立柱建物であるが，時期は不明である。北側で検出した1辺約3.5m，深さ1.5mの方形土坑も時期が明らかでない。

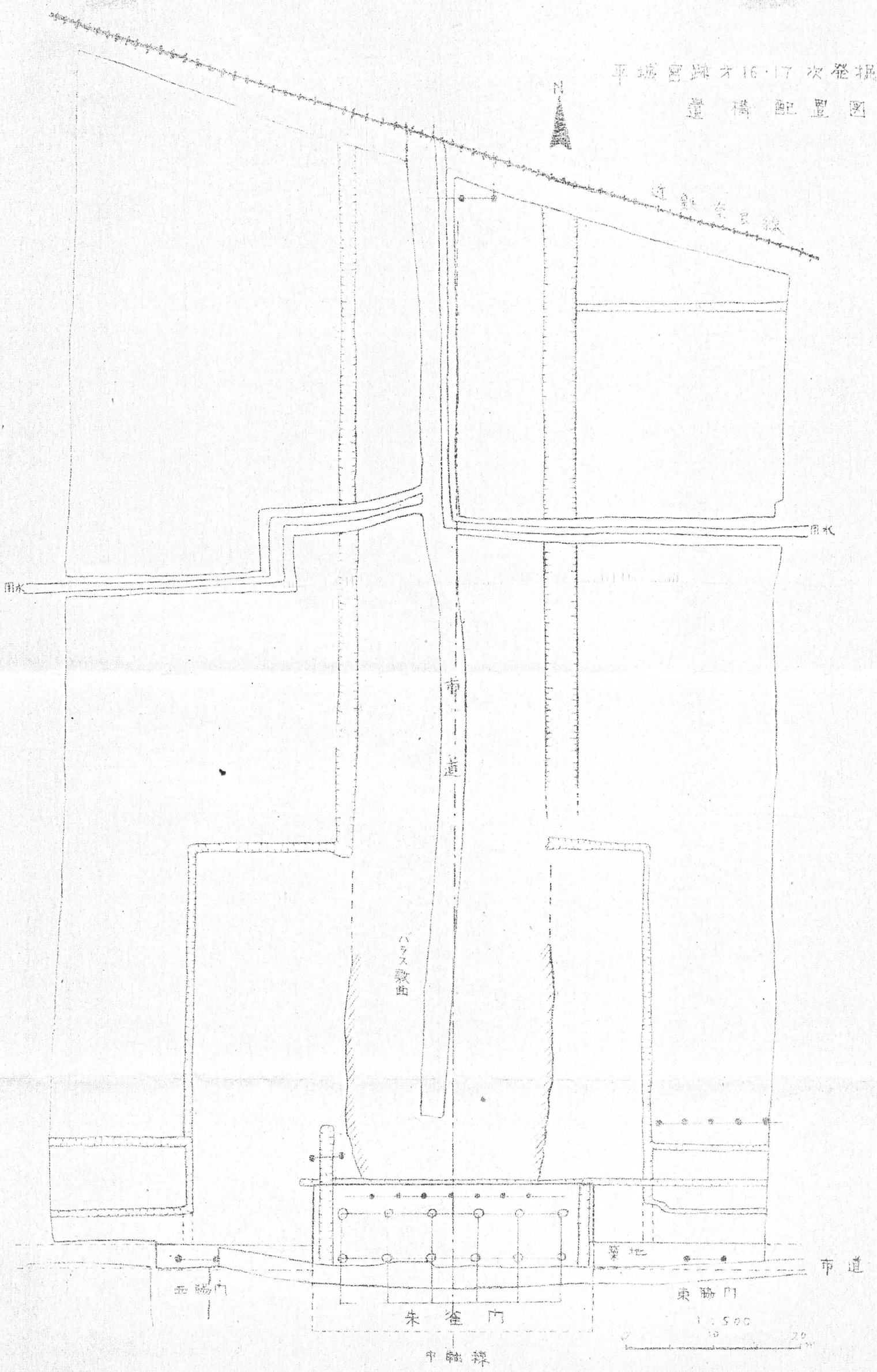
これによって平安宮の蘭林坊の前駆的存在と考えられるオ2次内裏北部地域の発掘を一応終了した。

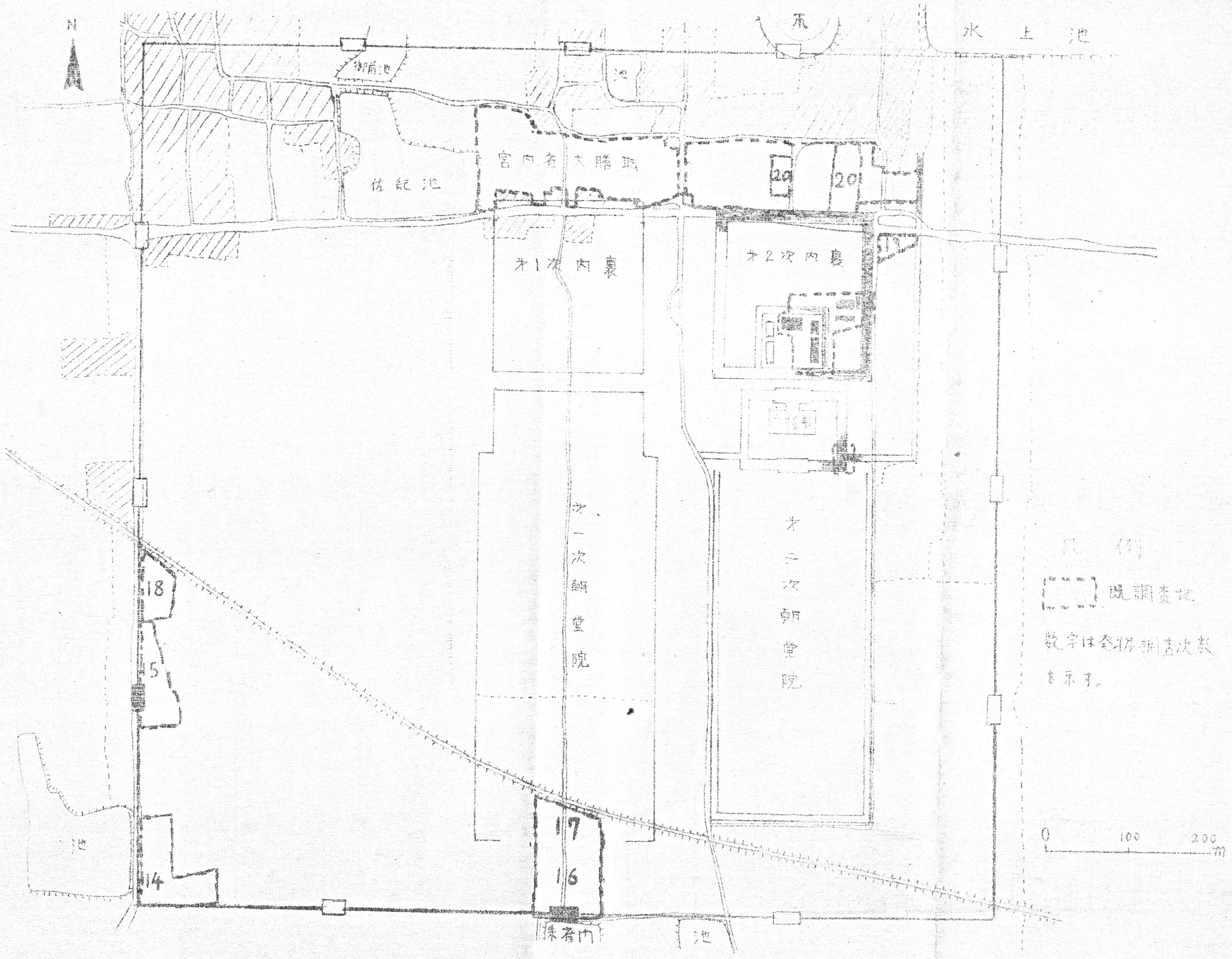
東地区では南寄りにオ2次内裏内部北側を限る築地回廊の北側柱列と，これに付随する凝灰岩づくり雨落溝，その北にある東西柱列，内裏北部の南面築地など，前年度調査した遺構の東延長部が検出された。また，調査地域の北寄りを斜行する溝も，オ13次調査で検出されたものの東延長部である。この地域の中央部には大きな凹みがあり，或は苑池かとも考えられる。

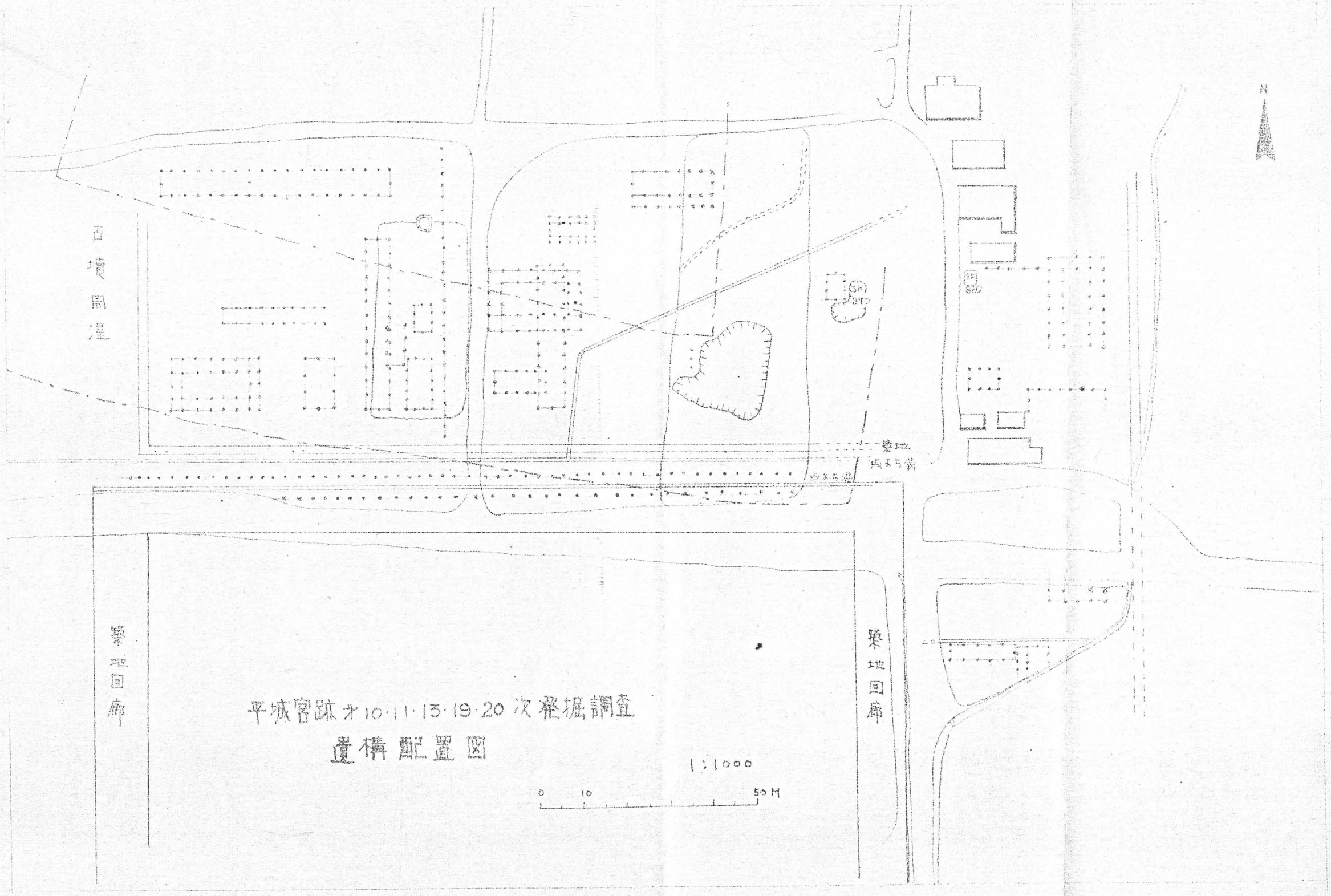
出土遺物としては瓦・土器など多数あるが，特記すべきものとして三彩の鬼瓦がある。

なお，東西両地区の大半は市庭古墳前方部をめぐる周濠部にあたるため，遺構は多く埋土上に構築されている。

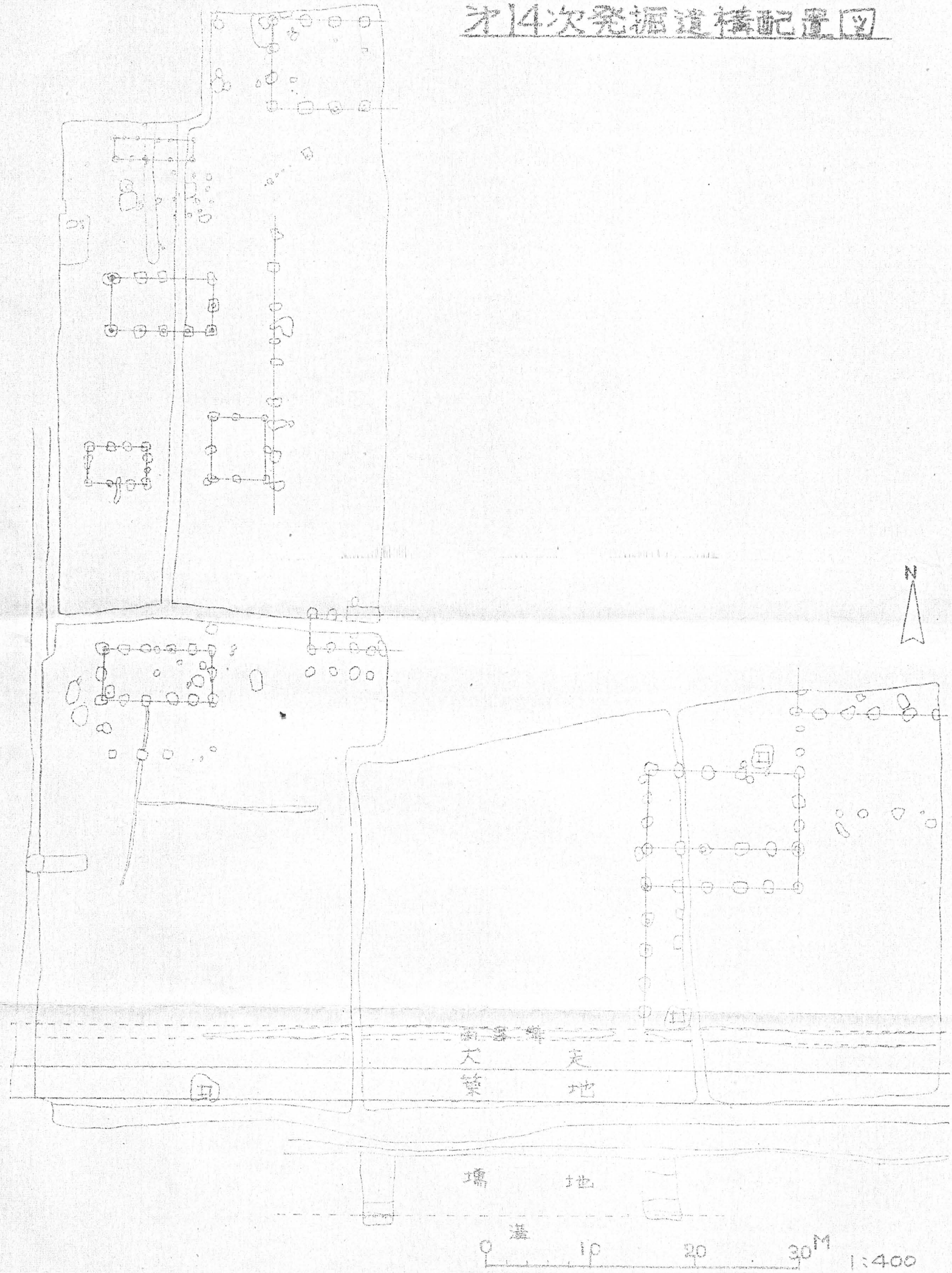
平城宮跡第16・17次発掘調査 遺構配置図



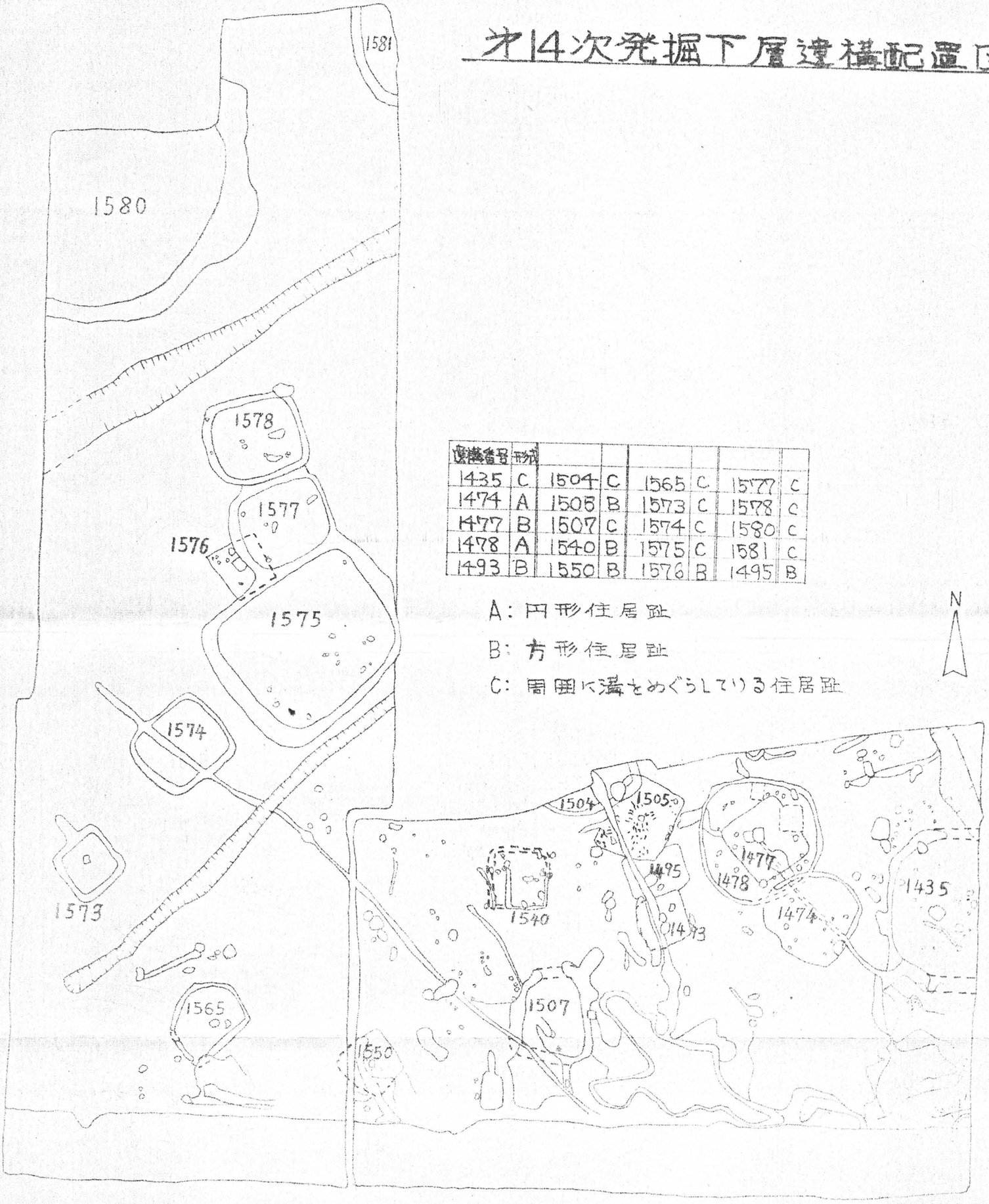

N
御前池
池
瓦
水上池
佐紀池
宮内省大膳職
20
20
才1次内裏
才2次内裏
才一次朝堂院
才二次朝堂院
18
5
14
17
16
楽者門
池
池
凡例
既調査地
数字は発掘調査次数を示す。
0
100
200
m


N
築地回廊
築地回廊
築地回廊
築地回廊
築地回廊
平城宮跡オ10・11・13・19・20次発掘調査
遺構配置図
1:1000
0
10
50M

第14次発掘遺構配置図



第14次発掘下層遺構配置図



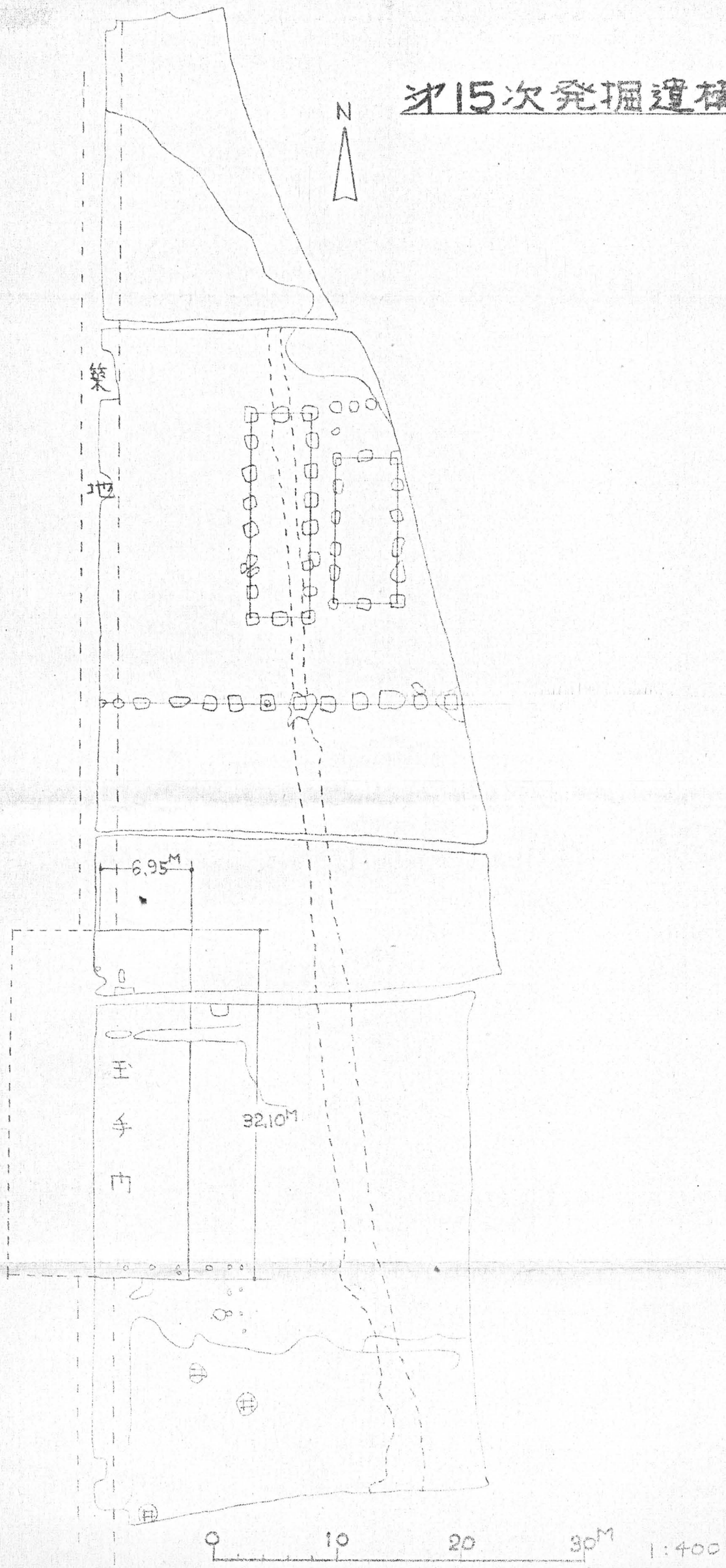
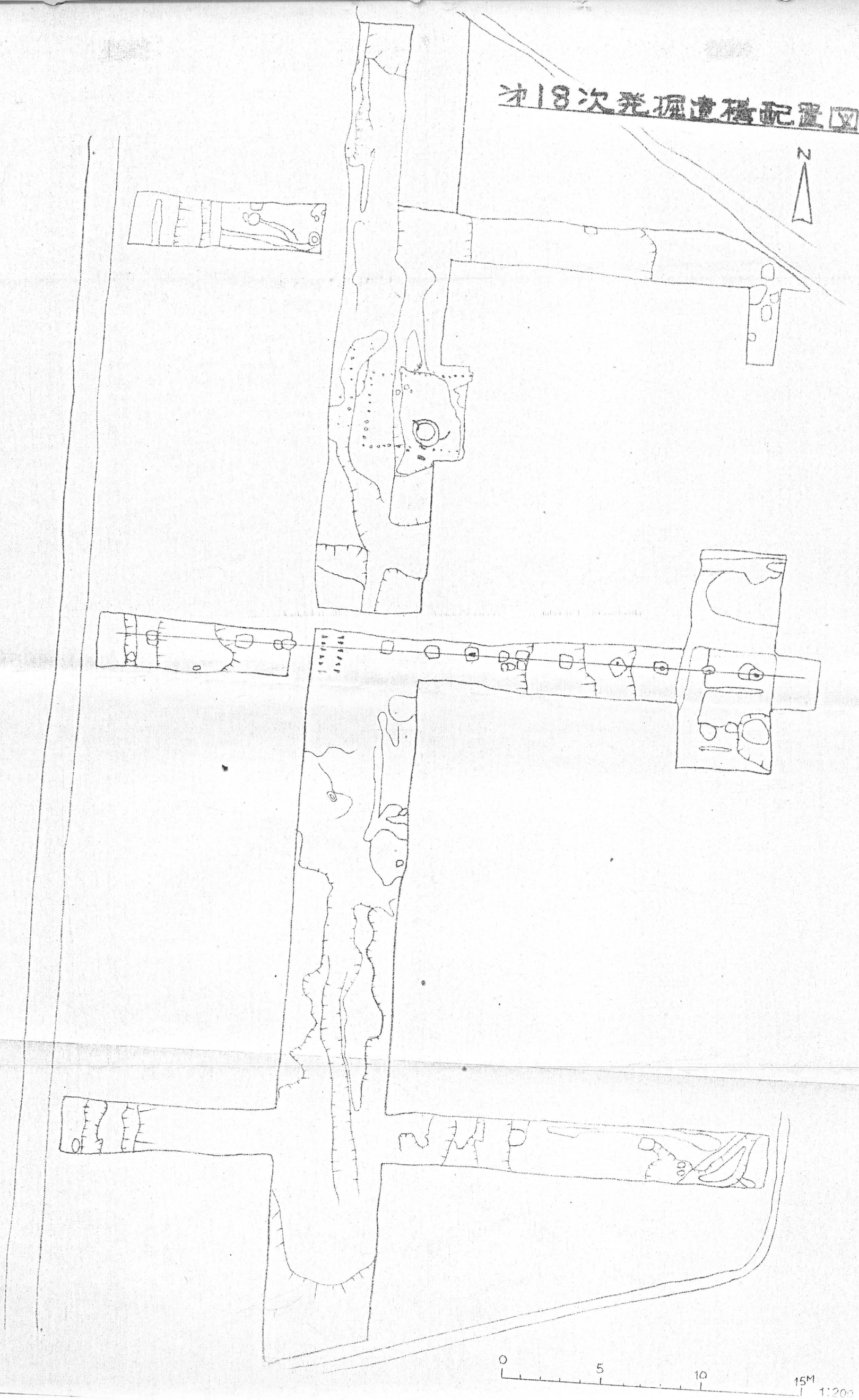
遺構番号	形式						
1435	C	1504	C	1565	C	1577	C
1474	A	1505	B	1573	C	1578	C
1477	B	1507	C	1574	C	1580	C
1478	A	1540	B	1575	C	1581	C
1493	B	1550	B	1576	B	1495	B

A: 円形住居跡

B: 方形住居跡

C: 周囲に溝をめぐらしている住居跡

第15次発掘遺構配置図



第18次発掘遺構配置図